

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381077

研究課題名(和文) 保育者の臨床的判断の創出を核とした熟達化プロセスの検討

研究課題名(英文) Study of expertise process of preschool teachers:Focusing on creation of clinical judgement

研究代表者

藤本 松香(古賀松香)(Fujimoto (Koga), Matsuka)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：70412418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、実践時にみられる保育者の専門性について、保育観察及び保育後のインタビューを通して検討した。その結果、保育者は子どもの社会情動的スキルにかかわる発達の姿に課題意識をもつこと、実践において感知される子どもや場の独特なありように着目し、意味づけを繰り返しながら臨床的判断と実践行為を微調整していること、その意味づけと実践行為において中堅以上の保育者で熟達化がみられることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to look into the expertise of preschool teachers in their practice through observations and interviews after their practice. As a result, it was revealed that preschool teachers have awareness of issues in development of children's social and emotional skills, and are paying attention to the unique statuses of children and the place sensed in the actual practice, repeating the process of interpreting them to fine-tune their clinical judgement and actions in their practice, and in their skills of interpretation and actions in their practice, mid-level and higher preschool teachers showed developed skills.

研究分野：幼児教育

キーワード：保育者 専門性 臨床の知 実践知 熟達

1. 研究開始当初の背景

子ども・子育て支援新制度の中で、保育・幼児教育施設が多様化し、その一定以上の保育の質の担保や質の向上が求められている。当然ながら保育実践の質にとって重要なのは、保育者の専門性である。これまで、この保育者の専門性に関して、保育者の実践方略や実践知に関する研究等が行われてきた。高濱(1993)は保育実践の観察から、ごっこ遊びのテーマとプラン共有には4段階の発達段階があること、保育者は幼児の遊びの局面の変化に合わせて関与の仕方を変えることで、さらに遊びの変化を引き起こしているとした。また、砂上らは、保育者が経験的に保持している暗黙的な知識や思考様式、方略の総体を「実践知」として定義し、他園の片付け場面の映像を刺激としたグループインタビュー(多声的ビジュアルエスノグラフィー)を用いて検討を行っている。その一連の研究では、保育者の実践知が、園庭の広さや保育の流れといった園の構造的特徴(2009)、戸外か屋外かという状況(2012)、年間における時期(2015)に影響を受けることが明らかにされている。

しかし、実践知とは、元々臨床現場で最も活発に発現し、言語化される以前の知や暗黙的思考、身体的ふるまいを多く含む概念である。保育者の実践時における判断には、多くの子どもや遊び及び活動がダイナミックに動く複雑な状況に加えて、個別の子どもの理解やそれまでのかかわりの質感といった身体知の蓄積等、個人に密着した固有の知が大きく関与していると考えられる。つまり、その専門的な知の発現は、自らが担任している子どもやその場の動きに密接に絡んでいるだろう。また、保育者自身が言語化したり認識化したりすることが可能な側面だけでなく、実践時の即時的、暗黙的で身体的な知が絡んでいることが推測される。特に保育者の身体的な知が保育実践においてどのように用いられているかについては、検討方法もまだ確立されておらず、明らかになっていない。

また、保育者の熟達化について、高濱(1997)は、保育者の専門的知識は経験と共に増えること、初心者と経験者の違いは、幼児をとらえる文脈とそのとらえかたに示されており、経験者はより多くの推論をし、幼児の状態を具体的かつ詳細な文脈情報を使ってとらえていることを明らかにしている。加えて、保育における問題解決には、文脈と結びついた独特の手がかりやこつが使われていることが示唆され、経験者は子どものタイプに応じて特定の場面や状況をねらって見ていると言う。この保育者が「ねらいを定めてみる特定の場面や状況」に関して、ヴァンマーネン(1991)は、子どもに対する何らかの教育的な働きかけが期待される状況に対して、能動的に出会うこと(active encounter)を「教育的瞬間(pedagogical

moment)」とした。鹿毛(2007)は、授業などの教育場面に埋め込まれた教育的瞬間を逃さずに適切な働きかけを行うことを「教師の出」と呼んでいる。保育者の実践時における即興的な関わりは、「保育者の出」とも言えるものであろう。保育実践においては、それぞれの子どもの活動が絡み合いながら展開する中で、「今ここで関わるべきところ」を瞬間的に判断する必要がある。そして、その判断に従って選択した場面に対して、優先的に関わっていくのである。保育とは、臨床現場における判断と実践の連続である。保育者は、子どもにとっての状況や活動、行為の意味を感知し、「今ここで関わるべき瞬間」を逃さずに関わろうとするものと考えられる。

しかし、保育者が実践において、特定の場面や状況をどのような課題意識に基づいてねらってみるのかは、明らかにされているとは言いがたい。また、実際に教育的瞬間を保育者がとらえたとき、実践行為を創出する判断にはどのような特徴があるかや、保育者が用いる専門的な知が保育者のもつ経験によってどのように異なるのかも必ずしも明確ではない。こういった保育実践行為そのものにみられる臨床的な専門性の解明が待たれている。

2. 研究の目的

保育者が自ら関わっている固有の子どもや関わりの実践状況において発現する専門的な知を、「臨床の知」(中村、1992)と位置づけ、検討する。その際、保育者自身が言語化できる知に限らず、実践時の身体的な関わりに表れる知についても検討を行う。その上で以下の3点を明らかにすることを目的とする。

保育者は実践においてある特定の場面や状況をどのような課題意識をもち、ねらってみているのか。また、実践行為を創出する臨床的判断にはどのような特徴があるか。

暗黙的・身体的なものも含めた実践時における臨床的な知が、保育経験によってどのように異なるのか。

担任する一年間に、課題意識と判断はどのように変容するのか。

3. 研究の方法

保育者の専門的な知を「臨床の知」と位置づけて検討するために、保育者自身の実践の中で発現する知を抽出する方法をとることとした。具体的には、「対話的ビジュアルエスノグラフィー」(古賀、2017)の方法により、縦断的観察と横断的観察の両方を行うこととした。

対話的ビジュアルエスノグラフィーとは、保育者自らの実践を研究者がビデオに撮り、その日の実践の映像をみながら、印象的だっ

た場面や気になった場面について、保育者と研究者が語り合う方式でインタビューを行うものである。具体的には、子どもたちが幼稚園に登園する9時頃から降園する14時頃までを観察時間とし(昼食時間を除く)、iPad mini(撮影アプリケーション:CavScene)を用いて、一日の保育について映像記録を撮った。縦断的観察については、保育室に固定カメラを設置し、保育者の腕にアームバンドで小型マイクを装着してもらった。保育終了後に、1時間半程度のインタビューを行い、ICレコーダーと筆記メモで記録した。その際、保育者にとってはその日の実践の省察の時間となるよう、共に映像を見ながら互いの見方を語り合うように心がけた。

保育観察に当たっては、保育者に「特別支援は必要とされていないが、指導が難しいと感じる幼児」を1名抽出してもらい、その抽出児を中心した観察を行うこととした。

また、分析においては、中村(1992)の「臨床の知」の概念を用いることとした。中村は、「臨床の知」を「科学の知」と対比させ、その構成原理を(1)コスモロジー、(2)シンボリズム、(3)パフォーマンスとした。コスモロジーは、場所や空間を、普遍的で均質的なものとみるのではなく、一つ一つが有機的な秩序をもつ固有の意味世界とみなす立場とされ、シンボリズムは、物事には多くの側面と意味があるのを自覚的に捉え表現する立場とされる。また、パフォーマンスは、相手や自己を取り巻く環境からの働きかけを身体に受けつつ相互作用する、人間の身体性を帯びた行為とされる。保育者の実践時の知のありようとは、この「臨床の知」の構成要素で整理されるのではないか。このような考えに基づき、本研究では、保育者自らの実践時における臨床的判断について、「臨床の知」の3つの構成要素を観点として分析を行う。

研究(1) 横断的研究

対象:遊びを中心とした保育を行っている国公私立園7園18名の保育者

調査期間:2015年11月~2016年3月

インタビューガイド項目:

- 対象児を選んだ理由
- 昨日までの気になる姿と遊び
- 対象児に対する保育目標(短期・長期)
- 今日の対象児とのかかわりの留意点
- 今日のクラス全体へのかかわりの留意点
- 今日の感触/迷ったところ/つかめた感じ
- 気になった場面、ビデオで確認したい場面(何がなぜ気になったか)

研究(2) 縦断的研究

対象:X園の担任保育者5名(延べ6名)

調査期間:2014年6月~2016年3月

インタビュー概要:当日の保育を振り返り、保育者/観察者が気になった場面について映像を見ながら語り合う

4. 研究成果

保育者の課題意識と実践行為の判断にみられる特徴

保育者はどのような子どもの姿に課題意識を持ち、特定の場面や状況をねらってみるのか。研究(1)において検討したところ、保育者は、子どもの他者とよりよく生きるための力、いわゆる社会情動的スキルにかかわる発達の様子について課題意識を持つことがわかった。特に、他者との関係の側面に関心が強く、子ども自身の思いの表現や他者の受容、友達との関わりをねらっていることがわかった。

また、実践行為を創出する判断は、実践の最中に微調整されることがわかった。保育者は課題意識を元に個別の保育目標をもつが、これまでの子どもの姿という長期の時間軸をもつとらえと、それまでに構築されてきた個別の子どもに関する関わりのコツを参照しながら、実践時に目にする子どもの姿の瞬間的理解を仮説的に構成する。その仮説的理解に基づいて、実際に関与する相互行為について暗黙的な判断がなされる。さらにその直接的関与の中で個別の目標とその場の周辺状況の条件と照らし合わせた判断の微調整が連続的に起こっていることが示唆された。

保育者のもつ臨床的な知と保育経験

- 「保育における臨床の知」の構成原理試案の提示

保育者が担任する子どもたちとの日常で出会う個別的な意味を瞬間的にどうとらえ、新たな意味を生み出し、行為するか、という実践における動的な知のありようについて検討した。まずはその検討に当たり、「臨床の知」(中村、1992)の構成原理を、保育実践の分析概念として練り直し、「保育における臨床の知」の構成原理試案(表1)を提示した。

表1. 「保育における臨床の知」構成原理試案

コスモロジー	その子どもその瞬間によって独特に織りなされる空間や場の意味をとらえようとする知のありよう
シンボリズム	子どもにとっての意味にアプローチするだけでなく、多様な意味の交流や新たな意味との出会いを創出する知のありよう
パフォーマンス	相手や自分を取り巻く環境からの働きかけを身体に受けつつ、子どもと保育者が身体的に相互作用する行為

- 「保育における臨床の知」の用いられ方

この試案にもとづき、研究(1)の対象者18名(初任6名、中堅5名、熟達7名)の保育実践とインタビューの分析を行ったとこ

る、以下のような保育者のもつ知の特徴がみられた。

・保育者は、個々の子どもの発達に関する課題意識を持ち、臨床的判断の微調整を行いながら、対象児にみる。その際に、その子どもの独特の行為の意味や場の意味が感知され、教育的瞬間が保育者の中で立ち現れる。

・子どもがより主体的に自己発揮できるよう、その子どもの行為の意味やその場の意味を繊細に感知しながら、具体的関与の微調整を行っている。特に中堅（経験年数6～10年）以上の保育者では、子どもの主体的な自己発揮に向け、視線を意識的にコントロールし目を合わせないようにしたり、子どもが集団に自然に入っていけるような身体の位置関係を調整したりする等、自覚的なパフォーマンスに特徴がみられた。

・中堅以上の保育者では、その子どもの行為から感知される独特の意味を、集団の中で受け止められやすい意味に転換したり、集団の中で多様な意味が交流したりするように援助していた（シンボリズム）。

担任する一年間の変化

保育者に「指導が難しいと感じる幼児」を抽出してもらい、その幼児を中心とした観察及び保育後のインタビューを1年間継続し、2年間で初任（経験年数1～5年）、中堅（経験年数6～10年）、熟達（経験年数11年以上）各2ケースずつの計6ケースの検討を行った（研究2）。その結果、以下のようなことが明らかになった。

・「指導が難しいと感じる幼児」の行動はその意味を理解することが難しく、「わからない」と語られることが多かったが、その行動は子どもの意図や思いの表れとして、多様な解釈可能性をもったものとして理解されていく（シンボリズム）。

・その子どもの独特な質感を感覚的にとらえていること（コスモロジー）が、その意図や思いを推測していく際の判断材料となっていく。

・特に指導が難しいと感じる幼児に対する理解は「わからなさ」で取り巻かれている。その「わからなさ」は、省察プロセスを積み重ねる中で言語化されていくが、解決・解消されるものではなく、残り続ける。「わからなさ」が残り続けることで、意味づけのプロセスが継続され、その意味づけの詳細が子どもの変容や成長と絡み、質的に変容していく（シンボリズム）。

・保育者が子どもを理解したいと願いつつ関わり続けることにより、子どもは保育者との関係を安定基盤として変容していく。保育者は、繰り返し省察のプロセスを踏むことで、よりよくその子どもをみようとし、子どもの小さな変化に気付くようになる。このような相互作用の関係の中で、実際の関わりにおける保育者のパフォーマンスが微調整され、新

たな関わりを創造していくようになる。

・熟達者においては、子どもにとっての行為の意味、その場の意味をとらえた上で、ズレを生じさせるパフォーマンスを繰り出す実践がみられた。それに対して、子どもは自分の行為と保育者の行為のもつ意味のズレに気付き、自らのパフォーマンスを変容させることが生じていた。

以上、保育者の専門性を「臨床の知」と位置づけて検討することを通して、保育者は実践の最中にその子どもや場のもつ独特な意味を感知し、その意味づけを更新しながら、実践行為の微調整を行い、子どもと状況に関与し続けること、特に意味づけと実践の相互行為において、熟達化が生じることが明らかになった。

引用文献

高濱裕子、幼児のプラン共有に保育者はどのように関わっているか、発達心理学研究、4、1993、51-59

砂上史子、秋田喜代美、増田時枝、箕輪潤子、安見克夫、保育者の語りにもみる実践知：『片付け場面』の映像に対する語りの内容分析、保育学研究、47(2)、2009、174-185

砂上史子、秋田喜代美、増田時枝、箕輪潤子、中坪史典、安見克夫、幼稚園の片付けにおける実践知：戸外と屋内の片付け場面に対する語りの比較、発達心理学研究、23(3)、2012、252-263

砂上史子、秋田喜代美、増田時枝、箕輪潤子、中坪史典、安見克夫、幼稚園4歳児クラスの片付けにおける保育者の実践知：時期の異なる映像記録に対する保育者の語りの分析、日本家政学会誌、66(1)、2015、8-18

高濱裕子、保育者の保育経験のいかし方：指導の難しい幼児への対応、保育学研究、35、1997、304-313

Max van Manen、The tact of teaching: The meaning of pedagogical thoughtfulness、The Althouse Press、1991、37-64

鹿毛雅治、子どもの姿に学ぶ教師 学ぶ意欲と教育的瞬間、教育出版、2007、183-193

中村雄二郎、臨床の知とは何か、岩波書店、1992、5-11、112-140

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

古賀松香、幼児期の社会情動的スキルを育む保育者の「臨床の知」、子ども学、査読有り、Vol.5、2017、30-52

〔学会発表〕(計 5 件)

古賀松香（2014年11月30日）「保育者の省察行為に関与する研究のあり方をめぐって 保育研究における語り合い法の可能性

」日本乳幼児教育学会第 24 回大会（広島大学）

古賀松香（2015 年 5 月 10 日）「保育者の抱える『わからなさ』と保育実践」日本保育学会第 68 回大会（椋山女学園大学）

古賀松香（2016 年 5 月 7 日）「実践時における保育者の臨床的判断 担任初期の試しつつ行為する実践の質的検討」日本保育学会第 69 回大会（東京学芸大学・白梅学園大学）

古賀松香（2016 年 11 月 27 日）「保育における臨床の知」日本乳幼児教育学会第 25 回大会（神戸女子大学）

古賀松香（2017 年 5 月 21 日）「保育者の臨床的判断」日本保育学会第 70 回大会（川崎医療福祉大学）

〔図書〕（計 1 件）

古賀松香、ナカニシヤ出版、対話的ビジュアルエスノグラフィーへの模索、伊藤哲司・呉宣児・原田満里子（編）東アジアの質的研究をつくる 日韓中台越クロストーク、印刷中

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤本 松香(古賀 松香) X Fujimoto(Koga)、Matsuka)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：70412418